

| | |
|------------------|---|
| Title | インターナショナル・ルールが日本のバレーボールに及ぼした影響について(その2) |
| Sub Title | Effects of the international rule on Japanese volleyball (2) |
| Author | 木村, 正一 (Kimura, Masakazu) |
| Publisher | 慶應義塾大学体育研究所 |
| Publication year | 1977 |
| Jtitle | 体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.17, No.1 (1977. 12) ,p.39- 48 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00170001-0039 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

インターナショナル・ルールが日本の バレーボールに及ぼした影響について (その2)

木 村 正 一*

1. 緒言と方法
2. 考 察
3. 結 論

1. 緒言と方法

インターナショナル・ルールの影響による日本のバレーボールの変化を探求せんとするものであり、前回は「その1」として基礎プレイ部門を中心としたので、今回は「その2」としてコンビネーションプレイ及びその他について調査・検討を試みた。

2. 考 察

速攻プレイへの影響について

旧9人制の速攻使用回数は極めて少なく、1セット3～4回が一般的とされていた。使用時期も現在と異なり先ずオープン攻撃で敵の守備陣を攪乱し、立直る余裕を与えずに素早く攻めるのが定石とされていた。学生チームとして昭和26年全日本総合に優勝した慶大チームは代表的な速攻チームであり、速攻を多用したのであるが、現在と比較すると遙かに少なく1セット7～8回程度であり、しかもAクイックのみの単調な使用法と異なり、自らの考案による時間差攻撃、平行プレーをAクイックと併用してその単調さを防いだのである。速攻はあくまでも補助攻撃である、速攻の多用はトスの性質上ブロックされる危険性がある。このような速攻使用に対する旧9人制の常識を打破って多用化に踏切らせたのは国際ルールの影響であり、東京オリンピックにおける速攻の成果であった。速攻に不慣れな外国チームにとって、東京オリンピックにおける日本の速攻プレイは脅威的であり、指導者がこのプレイの多用化を計ったの

* 慶應義塾大学体育研究所助教授

インターナショナル・ルールが日本のバレーボールに及ぼした影響について (その2)

も当然の事と言える。組手ヒット直線パスの考案はこの指導者たちの希望を現実のものとしたのであるが、東京オリンピック以後の日本の速攻プレイは、常にサーブレシーブの段階から速攻のリズムで攻撃を展開する速攻多用化時代を迎えたのである。

表1 速攻使用率
(モントリオール決勝リーグ平均)

| | | | | |
|----|-------|-------|-------|-------|
| 男子 | 日本 | ポーランド | ソ連 | キューバ |
| | 68.0% | 45.5% | 49.6% | 43.6% |
| 女子 | 日本 | ハンガリー | ソ連 | 韓国 |
| | 75.2% | 8.3% | 21.5% | 54.8% |

表1はモントリオールオリンピック決勝リーグにおける各チームの平均速攻使用率である。女子は男子と比較してジャンプ力が劣るため、本格的な速攻プレイは不可能であると言われてきたが、モントリオールで初めて本格的な速攻を身につけた日本、韓国、未だ身につけていないソ連、ハンガリーの実情がそのまま使用率の上で大差となって示されており、日本女子チームの優勝、韓国女子チームの躍進の一因が速攻を修得したことにあると言われる事実を裏書するものと言えよう。

男子チームにおいては女子チームと異なり、すべて同型の速攻チームであり、その中で日本の速攻使用率がセット最高81%を筆頭に平均使用率においても最高率を示している。これは他の3強が常に速攻のリズムから速攻を囂にオープン攻撃を主とする戦法、すなわちブロック力の分散を目的として速攻を使用するのに対して、日本は速攻を囂に他の速攻を使用する速攻を主武器とする戦法をとっているからである。オープン攻撃に切り札を持つ3強に比較して切り札を持たぬ日本の当然の作戦であったかも知れないが、速攻はあくまでも補助攻撃であるというバレーボールの常識を再検討する必要がある、ここにモントリオールにおける敗因の一つが見られると同時に、今後のチームづくりの課題があると言える。

フェイント、軟攻の多用化について

9人制に比較して6人制の守備陣形は、コート中央部の空間が大きい。これは高いネット、高いブロックのため鋭角のスパイクより鈍角のスパイクをより多く必要とする。これを考慮して少ない守備要員をエンドライン深く重点的に配置するため、必然的にコート中央部に空間が出来るのである。これが9人制と比較してフェイント、軟攻を効果的な攻撃方法として多用する原因である。従って守備陣にとってはこの対策が悩みの種であり、特に強豪チームの対戦においてはこの対策の成否が直接勝敗に影響するケースが多い。ミュンヘン優勝の日本男

インターナショナル・ルールが日本のバレーボールに及ぼした影響について（その2）

子チームが相当の練習時間をこの対策に費して成功したことは周知の事実であり、また、これと反対にこの対策が甘かった日本男子チームが、モンリオール決勝リーグ対キューバ戦でフェイント攻撃の前に為す術もなく敗退した事実を考える時、このフェイント、軟攻が如何に効果的な攻撃方法であるか、また、この対策が如何に重要であるかが分るのである。

セットアッププレイの活用について

9人制においては中・後衛陣の攻撃、ブロックへの参加等プレイ上の制限はなく自由であるが、6人制においては種々の制約があり、特に後衛の攻撃、ブロックへの参加に対しては否定的である。

インターナショナルルール第21条第1項「後衛はボールがネットの上端より低い位置にある場合以外はアタックライン内にて相手方コートにボールを返すことは出来ない……」。第2項「後衛はブロッキングに参加出来ない」。ルールで明瞭に制限されている通り後衛のブロック参加、アタックエリア内における攻撃への参加は禁止されているが、トスプレイに対する制約はない。言い換えれば、後衛がアタックエリア内において認められるプレイはレシーブとトスプレイである。この後衛に許された最少の権利を利用したのがセットアッププレイであり、セッターがバックに移動した際にレシーブはせず前衛に上ってトスプレイを行うことである。日本チームの参加以前の外国チームにとって、このプレイは単調な三段戦法の繰返しの中でスパイカーの数を増加し、スパイクの持ち味に多少の変化を与える程度のものであり、それほど重要視されなかった。日本チームの参加は単調な三段戦法の中にクイック戦法を導入したことであり、A, B, C, D, 時間差等の各種の速攻を駆使する日本にとって、このセットアップによるアタッカーの増員は、複雑なコンビネーションバレーの特徴を発揮する上で非常にプラスとなったのである。攻撃の権利を持つ前衛陣を総動員して展開される複数の速攻に遅攻を織り交ぜた持ち味、テンポの全く異なるコンビネーション攻撃は外国チームに大きな衝撃を与えると同時にこのセットアッププレイの最も効果的な利用法を認識させたのである。

ローテーションプレイの影響

サーブ権をとるごとにポジションを移動する6人制独特のルールは、選手にオールラウンドプレイを要求し、その質的向上を促したとみられるのである。

9人制においてはポジションが固定しアタッカーはアタックのみを、レシーバーはレシーブのみに専念するのが一般的であった。いわゆるプレイの分業である。このシステムは当然、優秀なアタッカーでありながらレシーブは全く未熟であると言うような変則的なプレイヤーの横行を許し、バレーボールの質的向上の上に大きな障害となっていたのである。この9人制から

インターナショナル・ルールが日本のバレーボールに及ぼした影響について (その2)

長身のスパイカーを集めてつくられた東京オリンピックの男子ナショナルチームの練習の第一課題は、当然レシーブ力の強化であった。旧9人制のアタッカーを6人制に移入させる場合の大きな障害は、レシーブ力の欠如にあったのである。従ってローテーションの必要から選手個々がアタック力、レシーブ力を兼備したオールラウンドプレイヤーでなければ通用しない6人制のルールは、旧9人制の欠陥であった変則プレイヤーの存在を完全に抹殺したと言えるのである。

レシーバーの動きを熟知するアタッカーと、アタッカーの攻めのテクニックを読みとれるレシーバーによって織りなされる虚々実々の駆け引きは、ローテーションプレイによる選手の質的向上を示すものであり、現在の高度なバレーボール発展の上に大きな役割を果たしていると言えるのである。

チームの大型化

表2は6、旧9人制の代表的なチームの平均身長である。特に慶大チームは旧9人制史上最高の大型チームと言われたが、現在のナショナルチームより約15cmも低く、如何に現在チームが大型化しているか分るのである。これは6人制のネットの高さ、コート狭さ、あるいはローテーションプレイが長身選手の存在を絶対的なものとし、更に東京オリンピック後に行われたブロックルールの改正が、長身選手のスパイクを真上からブロック出来る大型選手の存在を必要不可欠のものとしたためである。ネット上空での大型選手による攻守の駆引は、従来バレーボール最大の醍醐味と言われていたスパイク対レシーブのイメージを、高いスパイク対高いブロックへと変化させ、バレーボールを人間が高さの極限に挑むスポーツとしたのである。今回のモントリオールにおける再度のブロックルールの改正は、チーム大型化の傾向を強めると同時に、名実ともにオールラウンドプレイを要求される日本にとって、非常に厳しい不利な改正であると言えるのである。

表2 チーム平均身長

| 男子チーム名 | 種目 | 平均身長 | 女子チーム名 | 種目 | 平均身長 |
|-----------------------|----|-------|-----------------------|----|-------|
| 昭和29年国体優勝 慶大 | 9 | 176.1 | 昭和26年全日本優勝 鐘紡四日市 | 9 | 162.5 |
| 東京オリンピック 日本代表 | 6 | 185.0 | 東京オリンピック 日本代表 | 6 | 170.3 |
| メキシコオリンピック 日本代表 | 6 | 188.0 | メキシコオリンピック 日本代表 | 6 | 172.5 |
| ミュンヘンオリンピック 日本代表 | 6 | 190.0 | ミュンヘンオリンピック 日本代表 | 6 | 173.1 |
| モントリオールオリンピック 日本代表 | 6 | 190.7 | モントリオールオリンピック 日本代表 | 6 | 173.8 |

インターナショナル・ルールが日本のバレーボールに及ぼした影響について (その2)

大型化傾向は選手の選考にも影響を及ぼしている。旧9人制時代の選手は実力本位であったが、現在は身長重点主義となり、実力不足を長身選手の将来性で補う傾向を生み出している。

このチームの大型化傾向は外国と比較した場合日本は非常に不利である。長身選手の層の厚い外国にとっては、数多い長身選手の中から素質のある選手を選び優秀なプレイヤーに育てあげる。日本にとっては数少ない長身選手を、素質の如何に拘らず大切に育てあげる。日本の場合充分な選択は許されないのである。更に長身選手特有の動きの鈍さも、外国選手に比較した場合日本選手により多く感ぜられるのである。

スポーツが勝利を目的として争われる以上、技術はもちろんのこと体力、精神力、その他あらゆる面での勝負であり、究極は人と人との戦いである。その最も大切な出発点において長身選手の不足と言うハンデを背負わなければならない日本は、非常に不利な立場にあると言えるのである。

練習内容の変化

9人制に比較した場合、6人制の試合は長時間を必要とする場合が多い。ミュンヘンの決勝リーグにおける対ブルガリヤ戦、モントリオール決勝リーグにおける対ポーランド戦等、技術的に高度で実力が伯仲した試合にこの傾向が見られる。試合所要時間が3時間を超える熾烈な大試合の場合、勝敗の帰趨を決定する要素はもはや技術的なものだけではなく、それ以上に体力・精神力が大きな決め手となるのである。日本の大型選手の場合、体力的に外国選手に劣り、試合が長びくにつれて動きもまた鈍くなる傾向がある。これに着眼した指導陣がバレーボール体操を考案実施させ、ミュンヘンにおける快挙の一因となったことは、本研究所紀要第12巻第1号で述べた通りであるが、これを契機にバレーボール界に基礎体力養成重点の、従来の練習内容を大幅に改良した練習方法を採用するチームが多くなったのである。

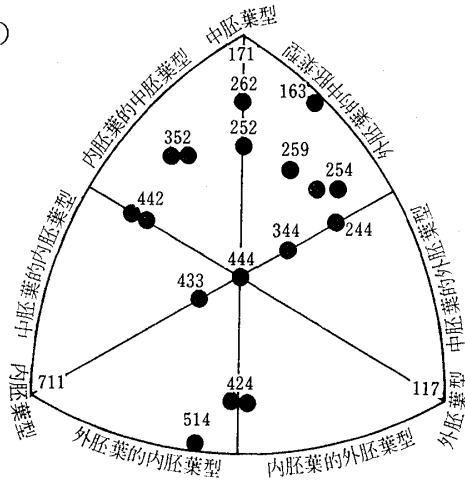
表3は現在日本における6人制のトップクラスチームの総練習時間と体力トレーニング時間の一覧表である。男子に比較して女子の練習時間が豊富なため、体力トレーニングに配分される時間も多し。特に女子の鐘紡が体力トレーニングに重点をおいてチームのレベルアップを計っているのが良く分かる。旧9人制時代においてはこの体力トレーニングは毎日の練習にはほとんど実施されず、冬季のオフシーズン中にボールを持たずに専ら体力トレーニングが実施さ

表3 総練習時間と体力トレーニング時間 (単位 時間)

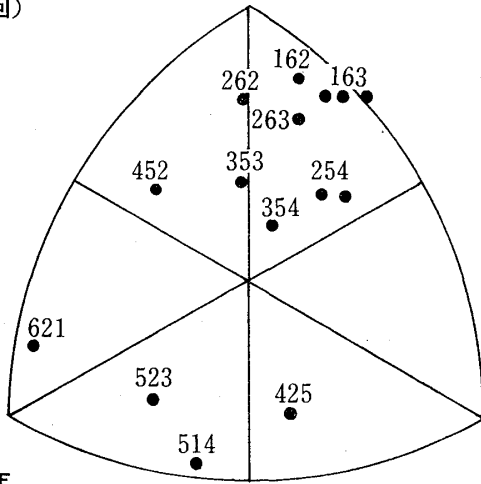
| チーム名 | 性別 | 総練習時間 | 体力トレーニング |
|--------|----|-------|----------|
| 新日鉄 | 男 | 4:30 | 1:00 |
| 日本鋼管 | 男 | 3:00 | 0:30 |
| 専売広島 | 男 | 4:00 | 0:45 |
| 富士フィルム | 男 | 4:00 | 1:00 |
| サントリー | 男 | 5:00 | 1:00 |
| 東レ | 男 | 4:00 | 0:30 |
| 日立 | 女 | 7:00 | 1:30 |
| 鐘紡 | 女 | 8:00 | 3:00 |
| 富士フィルム | 女 | 6:00 | 1:00 |

第1図 慶應義塾大学体育会バレーボール部選手の体型

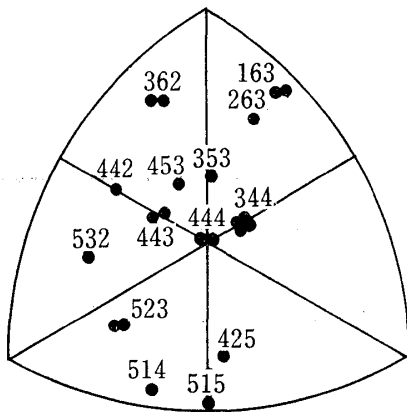
1974年
(第3回)



1964年
(第2回)



1961年
(第1回)



| NO | 呼称 | 通称 |
|-----|------|-----|
| 711 | 内胚葉型 | 肥満型 |
| 117 | 外胚葉型 | 細長型 |
| 171 | 中胚葉型 | 闘士型 |

1974年

| 氏名 | 身長 | 体重 | H/√W | 体型 |
|------|-----|----|-------|-----|
| ・栗田 | 174 | 71 | 13.27 | 442 |
| ・阪井 | 181 | 70 | 13.25 | 254 |
| ・吉田 | 171 | 65 | 12.85 | 352 |
| ・木下 | 188 | 75 | 13.45 | 254 |
| ・沢野 | 181 | 71 | 13.25 | 424 |
| ・秋山 | 172 | 63 | 13.10 | 163 |
| ・小松崎 | 174 | 72 | 12.65 | 352 |
| ・萱嶋 | 171 | 58 | 13.40 | 244 |
| ・宇枝 | 169 | 58 | 13.20 | 253 |
| ・西尾 | 182 | 69 | 13.40 | 344 |
| ・田中 | 177 | 73 | 12.80 | 262 |
| ・篠田 | 177 | 70 | 13.00 | 252 |
| ・諏訪 | 170 | 62 | 13.00 | 444 |
| ・古田 | 166 | 62 | 12.70 | 442 |
| ・藤原 | 181 | 69 | 13.30 | 514 |
| ・松井 | 183 | 74 | 13.15 | 433 |
| ・三好 | 188 | 75 | 13.45 | 424 |

・レギュラー平均身長 180.4

1964年

| 氏名 | 身長 | 体重 | H/√W | 体型 |
|-----|-----|----|-------|-----|
| ・蔵口 | 170 | 59 | 13.25 | 254 |
| ・野田 | 177 | 68 | 13.15 | 354 |
| ・小林 | 175 | 72 | 12.70 | 452 |
| ・小島 | 183 | 81 | 12.80 | 262 |
| ・戸村 | 177 | 61 | 13.60 | 425 |
| ・長沢 | 172 | 64 | 13.00 | 523 |
| ・伊谷 | 179 | 69 | 13.30 | 514 |
| ・鈴木 | 175 | 68 | 12.95 | 263 |
| ・平林 | 176 | 83 | 12.20 | 621 |
| ・山岡 | 178 | 69 | 13.10 | 163 |
| ・鏑木 | 176 | 70 | 12.90 | 162 |
| ・黒田 | 177 | 70 | 13.00 | 353 |
| ・額田 | 180 | 72 | 13.10 | 163 |
| ・内藤 | 180 | 71 | 13.10 | 163 |
| ・副島 | 180 | 68 | 13.35 | 254 |

・レギュラー 平均身長 177

れていたものであり、この常時体力トレーニングを実施する練習方法は、バレーボール界の一大進歩と言えるのである。

選手の体型への影響について

旧9人制に比較してチームの大型化、基礎体力重点の練習方法は、選手の体力、体型に影響を及ぼすことは容易に推測されるところである。体力への影響については本研究所紀要で検討したので、今回は体型について検討したい。⁽¹⁾

第1回は本研究所々員であった米村が、シェルドンの体型分類法を参考にして3回にわたって調査した慶大体育会バレーボール部選手の体型である。

1961年に行なった第1回⁽²⁾の調査対象は9人制関東大学2部リーグのメンバーであり、1964年に行なった第2回は6人制関東大学1部リーグ、インカレ優勝チーム、1974年に行なった第3回⁽³⁾は6人制関東大学2部リーグのメンバーであり、第2回と3回のレギュラーの平均身長を比較すると3.5厘の差があり大型化していることが分る。各チームの練習時間は4時間程度であり、第3回のチームのみが約1時間の体力トレーニングを毎日の練習に組み入れており、他は15分程度の軽度な準備体操のみで特別な体力トレーニングは行っていない。米村の調査によれば、バレーボール選手の体型の特徴は、ほとんどの場合中胚葉の発達において秀れており、全体的に中胚葉型または外胚葉型に属するものが多いとしており、第3回のチームにこの傾向が強いと指摘している。更に1、2回のチームが陸上競技の短距離選手の体型に類似しているのに対して、3回目のチームは中長距離選手の体型に類似し、両者の体型に相違があることを認めている。

米村の調査報告は以上であり、参考例として引用したのであるが、毎日の体力トレーニングが体型に及ぼす影響については同一チームの比較でないため確認出来ないが、国際ルールの影響により過去に比較して現在のチームの大型化、かつ適度に発育発達した身体状況からトレーニングの効果と体型への影響が推測されるのである。

バレーボール人口の増大について

1895年、アメリカのウィリアム・G・モルガンが大衆のスポーツとしてバレーボールを創案したのであるが、その適度な運動量と経済適性は我が国においても多くの支持を受け、先ず女子中学生を中心として発展し、徐々に学生全般の体育、課外スポーツ、更に社会体育、レクリエーションの分野にと幅広く発展し、バレーボール人口も増加の一途をたどって来たのであるが、その発展の過程において、東京オリンピックにおける女子チームの優勝、ミュンヘンオリンピックにおける男子チームの優勝、更に大型選手によって展開されるスピードと迫りに満ち

インターナショナル・ルールが日本のバレーボールに及ぼした影響について（その2）

た試合の魅力がバレーボール人口増加の促進剤となったことは否定出来ない。これらの影響が単にプレイヤーの増加に貢献しただけでなく、これまでバレーボールに全く無関係であった人たちに、バレーボールに対する興味を抱かせバレーボールを理解させた功績を見落してはならないのである。東京オリンピック以後、日本リーグに、外国チームとの親善試合における会場を埋めつくす大観衆がこれらの事実を物語るののである。

表4 年度別全国登録チーム数一覧表 (日本バレーボール協会)

| 年 度 | 男 子 | | | | | | 女 子 | | | | | | 合 計 |
|-----|-------|-------|-----|-------|----|-------|-----|-----|-----|-------|----|-------|--------|
| | 一般 | 実業 | 大学 | 高校 | 教員 | 計 | 一般 | 実業 | 大学 | 高校 | 教員 | 計 | |
| 34 | 191 | 804 | 126 | 1,957 | 97 | 3,175 | 64 | 334 | 87 | 2,007 | 0 | 2,492 | 5,667 |
| 35 | 151 | 803 | 118 | 2,013 | 85 | 3,170 | 62 | 346 | 75 | 2,003 | 0 | 2,486 | 5,656 |
| 36 | 130 | 808 | 113 | 2,154 | 73 | 3,278 | 45 | 371 | 71 | 2,289 | 0 | 2,776 | 6,054 |
| 39 | 182 | 1,050 | 107 | 2,613 | 78 | 4,030 | 44 | 445 | 68 | 2,616 | 0 | 3,173 | 7,203 |
| 40 | 203 | 1,139 | 118 | 2,885 | 74 | 4,419 | 71 | 456 | 84 | 2,822 | 0 | 3,433 | 7,852 |
| 41 | 292 | 1,149 | 128 | 3,152 | 70 | 4,791 | 136 | 418 | 96 | 3,154 | 0 | 3,804 | 8,595 |
| 43 | 290 | 1,238 | 161 | 2,929 | 54 | 4,672 | 114 | 476 | 134 | 3,049 | 0 | 3,773 | 8,445 |
| 48 | 735 | 1,411 | 171 | 3,175 | 59 | 5,551 | 426 | 527 | 174 | 3,421 | 22 | 4,570 | 10,121 |
| 51 | 1,297 | 1,385 | 215 | 3,421 | 47 | 6,365 | 689 | 474 | 215 | 3,677 | 26 | 5,081 | 11,446 |

表4は日本バレーボール協会発表による全国登録チーム数年度別一覧表である。

男子教員チーム、実業団チームを除き全般的に年々増加の傾向を示している。一般チームの増加は、そのチーム構成の内容からみて、学生チームのメンバーが卒業後OBチームをつくり一般チームに加入したものと思われる。旧9人制において実力的に高いレベルにあった男子教員チームの減少は、6人制採用の影響によるバレーボール技術のレベルアップに伴う自然淘汰現象とみられ、実業団チームの減少は経済的な不況がその主な原因と見られる。

これらの登録チームは技術的に高い水準のものが多く、これら以外の未登録チームとして全国の小・中学校チーム、近年急激に増加し推定チーム数5万と言われる家庭婦人チーム、更に市町村単位の大会に出場するレクリエーションチームを加えると、全国のバレーボール人口の増加は測り知れないのである。

登録チームの種目別(6, 9)試合参加状況については全国的な集計がなされていないため神奈川県を参考とした。表5, 表6は神奈川県における協会登録チーム数一覧表と、これらのチームの中での一般、実業団について全日本総合選手権試合への種目別参加状況の一覧表である。

表5は表4と全く同じ傾向を示していることが分る。表6の種目別参加状況については、6人制よりも9人制への参加が圧倒的である。

表 5 年度別神奈川県登録チーム数一覧表

| 年 度 | 男 子 | | | | | | 女 子 | | | | | | 合 計 |
|-----|-----|-----|----|-----|----|-----|-----|----|----|-----|----|-----|-----|
| | 一般 | 実業 | 大学 | 高校 | 教員 | 計 | 一般 | 実業 | 大学 | 高校 | 教員 | 計 | |
| 33 | 9 | 51 | 4 | 62 | 4 | 130 | 3 | 19 | 2 | 68 | 0 | 92 | 224 |
| 37 | 12 | 77 | 3 | 104 | 3 | 199 | 0 | 32 | 1 | 107 | 0 | 140 | 339 |
| 38 | 18 | 116 | 4 | 106 | 3 | 247 | 1 | 42 | 1 | 107 | 0 | 151 | 398 |
| 39 | 24 | 120 | 4 | 112 | 5 | 265 | 2 | 40 | 1 | 108 | 0 | 151 | 419 |
| 41 | 32 | 129 | 4 | 111 | 2 | 278 | 14 | 42 | 2 | 107 | 0 | 165 | 443 |
| 45 | 36 | 132 | 6 | 105 | 2 | 281 | 8 | 49 | 3 | 109 | 0 | 169 | 450 |
| 46 | 43 | 152 | 5 | 114 | 2 | 316 | 13 | 52 | 2 | 118 | 0 | 185 | 501 |
| 47 | 43 | 164 | 7 | 132 | 2 | 148 | 14 | 44 | 5 | 136 | 0 | 199 | 547 |
| 48 | 49 | 177 | 4 | 128 | 3 | 361 | 18 | 50 | 5 | 131 | 1 | 205 | 565 |
| 51 | 71 | 163 | 6 | 126 | 4 | 370 | 23 | 51 | 5 | 128 | 2 | 209 | 579 |
| 51 | 72 | 162 | 7 | 134 | 2 | 377 | 28 | 48 | 5 | 133 | 1 | 215 | 592 |

表 6 全日本総合試合参加チーム数
年度別一覧表(神奈川県)

| 年 度 | 種 目 | 男 子 | | 女 子 | | 計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| | | 一 般 | 実業団 | 一 般 | 実業団 | |
| 36 | { | 6 | 0 | 4 | | 4 |
| | | 9 | | | 0 | 9 |
| 38 | { | 6 | 2 | 4 | 0 | 9 |
| | | 9 | 4 | 17 | 0 | 30 |
| 39 | { | 6 | 1 | 7 | 0 | 10 |
| | | 9 | 5 | 32 | 0 | 46 |
| 42 | { | 6 | 2 | 11 | 0 | 17 |
| | | 9 | 6 | 32 | 3 | 50 |
| 43 | { | 6 | 2 | 9 | 0 | 13 |
| | | 9 | 7 | 41 | 6 | 70 |
| 44 | { | 6 | 4 | 10 | 0 | 19 |
| | | 9 | 5 | 39 | 0 | 56 |
| 46 | { | 6 | 8 | 13 | 0 | 24 |
| | | 9 | 11 | 57 | 3 | 91 |
| 47 | { | 6 | 7 | 24 | 2 | 37 |
| | | 9 | 15 | 61 | 4 | 96 |
| 49 | { | 6 | 11 | 19 | 1 | 38 |
| | | 9 | 13 | 36 | 3 | 68 |
| 50 | { | 6 | 14 | 12 | 0 | 31 |
| | | 9 | 14 | 42 | 4 | 74 |

更に6人制参加チームについて調査した結果、一般チームは技術的に水準が低く勝敗を目的とせずレクリエーションとしての参加が多く、実業団チームは技術的に水準の高い名門チーム

インターナショナル・ルールが日本のバレーボールに及ぼした影響について (その2)

が大部分であった。このことは、大学、高校の学生チームの参加が6人制に限られている現状を考慮すると、現在6人制は学生チームと実業団のトップレベルにあるチームによって勝敗を目的とするスポーツとして発展しつつあり、9人制は一般チーム、実業団チームの大半によって社会体育、レクリエーションとして楽しまれていると言う傾向が見受けられるのである。

神奈川県が直ちに全国的な傾向であるとは断定出来ないが、神奈川県は全国的にも屈指のバレーボール発達県であり、登録チーム数の増加状況も、表4に示された全国のものと同様の傾向を示していることを考えると、この傾向が単に神奈川県のみでなく全国的な傾向であると言えるのではなかろうか。

6人制、9人制とプレイヤーの目的が異なるとは言え、国際ルールの影響によるバレーボール人口の増大と大衆への浸透性は測り知れないほど大きいのである。

3. 結 論

以上、コンビネーションプレイ及びその他の面からインターナショナルルールの影響を検討したのであるが、前回の基礎プレイ部門においては国際ルールの影響が日本の6人制バレーボール確立の上に大きな障害となったのに対して、今回はこれと全く対照的に各部門に好影響を及ぼし、日本の速攻プレイの高度化に貢献するとともに日本のバレーボールの質的向上を促したのである。セットアッププレイの活用による速攻コンビネーションバレーボールの確立、ローテーションプレイによる質の向上、国際試合の経験がもたらした基礎体力重視の練習法、更に6人制の魅力が生んだバレーボール人口の増大等、旧9人制時代に確立された日本のバレーボールは大幅に体質改善され飛躍的な進歩を遂げたのである。しかしながら国際ルールの影響を受けて進歩した日本と反対に、日本の速攻を吸収することによって進歩した外国チームの存在を考える時、インターナショナルルールの影響は日本のバレーボールの水準を高めると同時に世界の水準を高めたが、その代償として日本は唯一の武器である速攻の効力を失ったと言えるのであり、今後日本の進路は極めて厳しいものであることが予測される。

参 考 文 献

- (1) 慶應義塾大学体育研究所紀要 第12巻の1号, 木村正一
- (2) " " 第1巻の1号, 米村昌二
- (3) " " 第12巻の1号, 米村昌二